

6 研究開発上の課題、及び今後の研究開発の方向性

1 科学系人材の育成を図る「南高STEAM」の実践について

(1) 学校設定科目「SS探究I」における各種講座の配列の見直し

新規企画となるMS講座等、指導教材や指導法の共有など一定の開発を進めることができた一方、限られた年間時数の中で、生徒の学びの効果を高めていくには、実施内容の精選や配列、教材の再構築などの課題が残る。生徒の課題研究の進捗状況を観察すると、仮説とリサーチクエスチョンのつながりなどを理解しないまま研究を進めている班がある。講座の配列が多すぎて、生徒が消化不良の状態であったり、また、新しく赴任してきた教師の指導上の悩みに関しても同様の状況が散見された。「SS探究」指導の負担感が高まらないよう、講座の配列を見直すと共に、スモールステップの構成を検討する。

(2) 南高STEAMの教科授業実践上のシステム改善

各教員が、探究型授業の組み立てを工夫し授業を多く公開できたことは評価できる。ただし時間割の都合により、興味があっても参観できない実情もあり、多くの授業参観者があって校内で指導実践の共有が果たされるには、取り組む校内システムの改善が必要と考えられる。併せて、他校への普及発信も重要である。また、授業者本人・校内全体への実施後の評価や効果の還元を円滑に果たすことが大切である。生徒においては、授業実践後の評価を未来デザインカマスタートルーブリックへと繋げていく。

(3) 「未来デザインカマスタートルーブリック」と「探究力成長アセスメントテスト」の比較

作成した未来デザインカマスタートルーブリックにより、生徒の自己評価は集約できるようになった。客観資料として活用を図る目的で実施した探究力成長アセスメントテストでは「知識やデータ資料の羅列から関連づけが弱い」、「主張の軸が定まりにくい」等が挙げられ、説得力の高い課題研究に繋げていくための指導上の課題を教員間で共有、改善を図る。

2 科学的探究の基礎を育む「自然科学探究」の開発・実践について

テキストの作成や授業実践まで、一連の形態として実施できた。しかし、頻繁な探究活動の準備により、理科担当者にとっては負担がかかっていた面がある。今年度の実施状況を踏まえて、教材や授業内容の改善、作成するレポートの細かい部分の指導等を進め、専門理科や課題研究への関連性を高めていく。

3 目指す資質・能力を育む基盤となる「ながさき探究プラットフォーム」の構築について

第Ⅲ期申請時に検討した多様な外部接続の機会は、設定し実施できた。今後は各企画の実施効果をいっそう高めるため、年間を見通した適切な時期の配列、内容面での充実を図っていく。探究プラットフォームを本校生徒の課題研究や学びの機会として十分に活かせるよう、活用方法に改善を加える。

また、教員アンケートにあった「対外的な諸企画の内容を理解できておらず、評価が難しい」との意見の通り、外向けの活動に関しては、活動に関与するのが一部の生徒・教員に留まり、校内での認知度は低い。広報活動も適宜工夫しながら、他の生徒・教員への波及効果を高めていく。併せて、SSH校として地域に果たすべき本校の役割の認識共有を図る。

4 科学技術人材育成を進める「SSH科学部」の活性化について

SSHコース（Sクラス）の始動、専属科学部生徒の校内外での活動実績の高まりなど、SSH科学部の活性化は順調に進んでいる。探究プラットフォームのネットワークを活用し、生徒自身が積極的に外部専門家との連携を求めていくよう研究開発を進めることで生徒の主体性の向上を目指す。今後の活動の発展性を維持するために、Sクラス2期生が加わる令和7年度は、上級・下級生間の連携を図り、SSH事業におけるサイエンスリーダー的な集団として確立を目指す。